

明治学院歴史資料館

News Letter

No.14

2022

目次：

- 1 巻頭言 三次元点群データによる歴史的建造物のデジタルアーカイブ
/長谷川一（歴史資料館館長、文学部芸術学科教授）
- 2-3 井深梶之助の別荘「壺中庵」のこと
/ 松本智子（特任研究員）
- 4-5 資料館資料の保存対策 ～紙資料の金属留め具除去～
/ 細井守（特任研究員）
- 6 港区ミュージアムネットワーク、「2022 ミナコレ（MINATO COLLECTION）」への参加
/ 亀元円（学芸員）
- 7 2022 年度博物館実習 / 亀元円（学芸員）
- 8 明治学院歴史資料館 2022 年度主な活動、その他

巻頭言

三次元点群データによる歴史的建造物のデジタルアーカイブ

長谷川 一（歴史資料館館長、文学部芸術学科教授）

記念館、インブリー館、そして礼拝堂（チャペル）。これら3棟は、明治学院白金キャンパスに現存する歴史的建造物であり、学院にとって最大の文化財です。わたしたち明治学院歴史資料館では2022年5月、3棟それぞれについて、三次元レーザースキャナを本館屋上・建物の周囲・建物の内部に設置して、撮影・測定し、三次元点群データを取得しました。

三次元点群データとは、点ひとつひとつに三次元座標を格納したデータのこと。建物や地形といった立体を点の集合として、きわめて高い精度で表現することができます。この特性を活かし、三次元点群データは、地図製作はもとより、災害における被害状況の確認、大規模施設の設計検討、橋梁やトンネルの保守点検などの諸領域で幅広くつかわれています。

重要文化財や歴史的建造物にとって、三次元点群データは特別な意味をもちます。「万が一」のための基礎資料と位置づけられるからです。たとえばノートルダム大聖堂。パリの象徴であり、ゴシック建築を代表する建物でもあるローマ・カトリック教会のこの大聖堂は、2019年4月に発生した大規模火災により、尖塔などが失われました。その後、修復・再建プロジェクトがすすめられる過程で、偶然にも2014-2016年にスキャンされた高精度な点群データ——500億個もの点の集合——が存在することがわかり、計画立案に大きく貢献しました。

明治学院の歴史的建造物に「万が一」のことがおきるような事態はあまり考えたくないことではありません。けれども歴史的にみれば、幾たびもの被災を経て保存修理を重ねてきたこともまた事実です。三次元点群データがあれば、今後どのような事態が生じようとも、現在の姿を精密に復元することが可能です。つまりこの三次元点群データ・プロジェクトには、歴史的建造物群を文化財として学院が大切に保護してゆくことへの決意表明という側面があるのです。

もちろん三次元点群データの役割は、けっして「万が一」にそなえた「保険」だけにあるわけではありません。将来的なキャンパス再開計画や、研究・教育、あるいはアートへの応用など、さまざまな可能性を潜在させているはずです。

明治学院歴史資料館では、この三次元点群データをもとに、一般むけの映像作品を制作・公開しました（<https://www.youtube.com/watch?v=1PQziOLrCYY>）。同時に、建物の来歴に関する貴重な古写真も加えた学院長室制作による紹介映像も公開されています（<https://www.youtube.com/watch?v=Wqmai53d-7Q>）。あわせてご覧いただければ幸いです。

井深梶之助の別荘「壺中庵」のこと

松本 智子（特任研究員）

このたび、当館では、明治学院第二代総理の井深梶之助が詠んだ韻文を集め、『船はいつこにまよふとも一井深梶之助の和歌とその周辺一』（明治学院歴史資料館資料集第19集、2023年3月）として刊行した。

その中に収録した和歌や漢詩のうち、湘南逗子の別荘である壺中庵滞在中に詠まれたものも多い。



壺中庵

井深が晩年、壺中庵において悠々自適の生活を送っていたことはよく知られるが、その実態について取り上げられたことはなかった。そこで、まずは、諸資料から得られる壺中庵についての情報をここに整理しておきたい。

土地探しから建築、入居まで

井深の別荘建築計画は、昭和3（1928）年に始まった。土地の選定と建物の設計には、当時建築・設計技師であった井深の四男清見^(注1)が関わっている。当初、井深夫妻は、軽井沢でも貸別荘や土地を探していた^(注2)が、最終的に逗子を選んだのは、逗子にある尾崎行雄の別荘改増築工事の監督を依頼された清見が、昭和3年7月末から4ヶ月ほど逗子に滞在していた^(注3)ことが、少なからず影響していると思われる。

以下、当館所蔵「井深梶之助日記」^(注4)（「井深日記」と略す）によって、夫妻が壺中庵へ入居するまでの経緯を簡単に確認する。

井深が土地選定のため実際に逗子を訪れたのは、**昭和3年9月の半ば**である。〈9月15日〉花子と共に逗子に行き、前日より訪れていた清見の案内で、以前から話のあった披露山へ登り、そこで地主の宮崎庄太郎氏と面会。「問題ノ場所」を踏査したところ、地勢は西北を山に覆われ、

東南の見晴しも良い。ただし、井戸を掘って水が出るかどうかが問題であるため試掘を依頼した。清見の話によれば、その場所は地主宮崎氏によって開拓中とのこと。

〈9月23日〉清見、再び逗子へ行く（30日に帰宅）。例の土地は、今、地均し中で、井戸には未着手とのこと。

〈10月15日〉清見が逗子別荘の設画図を持ってくる。八帖、六帖、二帖に六尺巾長二間のベランダ付。「小ゼンマリシタル平家建」で「至極便利ソウ」であるが、井戸に良水が出るかどうか最も気がかりであった。〈10月16日〉清見との話し合いの結果、万一井戸水が出ない場合には天水を利用し、飲料水だけは坂下より運ぶこととして、建築に着手することを決定する。〈10月26日〉建築工事請負人の唐渡が来訪。逗子別荘の建築工事請負契約書を交わす。建坪は約18坪。〈11月6日〉逗子へ行き、

車で待っていた清見とともに別荘の建築現場に向かう。地均しは既に完了しており、土台石の穴を掘鑿中。井戸は既に六間ほど掘っているが水脈には未到達であった。地主宮崎庄太郎邸に行き、借地料の契約書を交わして帰京。〈11月21日〉上棟。ただし、井深は現地には行っていない。〈11月23日〉清見からの来信によると、上棟を首尾よく済まし、尚工事進行中。井戸水も上々で既に水は七尺ほどの深さに達し、かつ無色無臭とのこと。〈11月28日〉逗子へ行き、建築現場を見分。〈11月29日〉建築工事請負人の唐渡が来訪。落成は12月20日頃の約束。〈12月30日〉逗子へ行き、建築現場を見分。年内に落成の約束であったが未だ完成していなかった。「真ノ完成ハ来年一月半バ過ナルベシ」と予測。

昭和3年の日記帳巻末にある「補遺」には「覚」として、ベランダの上に欄間または武者窓を付けること、台所の床下をコンクリートにして床を上げ板にすること、座敷に炬燵を造ることなど、建築に際しての細かい要望8項目がメモされている。

年が変わって、**昭和4年**。〈1月9日〉花子と共に逗子へ行き、建築工事の進捗を見分。九分程完成していた。

〈4月11日〉逗子行の荷造りをする。〈4月14日〉壺中庵に到着し、蕎麦を食べ、花子・清見と3人で宮崎家へ挨拶に行った。

以上が、土地選定から井深夫妻が壺中庵に入居するまでの経緯である。夫妻は、清見の協力のもと逗子に最良の土地を得て、昭和3年10月16日に別荘の建築を決定する。当時、敷地は借地で約120坪あり、建坪は約18坪であった。昭和4年1月下旬頃には完成していたと思われるが、そのことは日記に記されていない。丁度その頃、井深のもとに、米国留学中の三男真澄について入院・危篤との連絡が入り、さらに2月6日には真澄死去の報が届いていた。3月20日の葬儀、28日の埋葬を終え、井深夫妻が壺中庵に入居したのは4月14日のことである。以降、井深が日記に「千客万来」と書き記したほど、壺中庵には親族や知人が多く集った。昭和16年まで所有していた^(注5)（井深は昭和15年に召天）。

壺中庵という名称

壺中庵の名称は、「壺中天」がもとになっている。井深は、昭和3年10月17日の日記に「壺中庵ノ詩、一首ヲ得タリ」として「有山有海又有泉 静観自得壺中天」と書き記している。また、続く日記の11月冒頭には、詩中の「壺中天」が「別天地」を意味すること、『後漢書』方術伝の「費長房」で語られる仙人壺公の故事に拠ることをメモしている。壺中庵の座敷には、「壺中天」の書が飾られた。この書は、井深が書道の師秋葉省像に依頼して書いてもらったもので、原物が当館に残っている^(注6)。



壺中庵の座敷に飾られていた秋葉省像の書

壺中庵の住所

昭和6年から11年頃に知人から井深に送られた書簡や葉書^(注7)の宛名を見ると、「逗子町東小坪1732」「東小坪披露下」「神奈川県逗子町披露下」と書かれている。おそらく「東小坪1732」と「東小坪披露下」は同じ場所と思われるが、現在のところ「披露下」という小字は地図や諸資料上では確認できない。「東小坪」は、昭和5年の『逗子町土地宝典』^(注8)によると、小坪の最も東に位置し、小字である「池ノ谷^{いけのやと}」と呼ばれていた場所に所在する（池ノ谷は、同じく小坪の小字である「披露」の南西に位置する）。



壺中庵と井深

「東小坪1732」は、現在の神奈川県逗子市新宿4丁目に含まれる。公道から少し入った小道を進むと、横幅1メートルほどの石の階段が見え、その階段を70段ほど上ると、壺中庵のあった高台に辿り着く。現在は私有地となっているが、建物自体や周りの景色は、壺中庵があった当時の面影を残

している。幸運なことに、現在の所有者の方のご厚意で敷地内を見せていただくことができた。裏手には竹藪があり、その竹藪と住居との間に、既に埋められているが壺中庵建築の際に掘られた井戸が今も残っている。

この場所から南方向に10分ほど歩いてゆくと、井深がよく散歩に出掛け、富士山を眺め、そして和歌を詠んだ逗子海岸に到着する。井深が晩年、別天地として好んだ壺中庵は、このような場所にあった。

(注1) 1903-1984、明治学院中学部を1921年に卒業（『明治学院同窓会名簿』1962年）、のち東京工業大学元附属工学専門部建築科に入学し、1924年3月卒業（『東京工業大学一覧 昭和6至7年』）。一級建築士（『一級建築士名簿』昭和35年版）。

(注2) 「井深日記」昭和3年（ID 1201610452）9月6日条。

(注3) 「井深日記」昭和3年（ID 1201610452）7月7日条および12月1日条。

(注4) 昭和3年（ID 1201610452）および同4年（ID 1201610453）の日記。

(注5) 『明治学院時報』第106号（1941年5月20日）「井深花子夫人の昨今」参照。

(注6) 「井深日記」昭和4年（ID 1201610453）4月28日条参照。原物の当館所蔵資料はID 3202070003。

(注7) 『井深棍之助宛書簡集』（明治学院、1997年）によると、「逗子町東小坪1732」とするのは、昭和6年8月25日付井深宛藤沢利喜太郎書簡（220頁）および〔昭和9年〕8月13日付井深宛笹尾糸太郎はがき（233頁）。〔昭和10年〕8月20日付井深宛児島三郎はがき（247頁）は「逗子町東小坪披露下」、〔昭和11年〕9月3日付井深宛原胤昭書簡（259頁）は「逗子町披露下」とする。

(注8) 田島武穂編、藤沢復興地図社、1930年。

資料館資料の保存対策 ～紙資料の金属留め具除去～

細井 守（特任研究員）

明治学院歴史資料館では、所蔵する紙資料の物理的保存についての対策を行っています。資料の保存・継承は、資料・情報の収集、提供と並んで、歴史資料館の重要な使命です。

【紙資料の保存対策】

紙資料の保存対策としては、①書庫の環境管理、②カビ対策、③紫外線対策、④酸性紙資料の脱酸性化処置、⑤保存・保護のための容器・装備、⑥保存・保護のための製本、⑦金属の留め具や針の除去、⑧カイルラッパー、ブックカバーなどが挙げられます（東京都立図書館「資料保存のページ」）。これらの保存対策は総合的に取り組んでいくべきものですが、今年度は特に、一部資料に対して⑦の「金属の留め具や針の除去」について作業を実施しました。

【資料の金属留め具除去】

資料館の所蔵資料はデジタルアーカイブズとして公開を図っていくことに重きを置いていますが、内容を目録に記録する際に「資料状態」の項目を設定し、「ホチキス留め、クリップ留め、サビ、変色、腐食、破れ」など、資料の状態や、悪影響を与えうる事柄も併せて記録しています（図1）。

今回対象とした資料群は、紙ファイル（フラットファイル。留め具に金属を含む）に収納されたもので、調査対象資料の約8割の「資料状態」欄には「クリップ留め、クリップ除去、サビ、変色」などが記されていました。資料は主に1960年代の文書、記録類。永続的に保存すべきものとして、主題別、対象事項別にファイルに綴じられていたものです。書架に並んでいる状態では別段、保存対策に急を要する感じではありませんでしたが、紙ファイルを開くと、ファイル自体の劣化に加えて、金属の留め具のサビや資料の変色が目につきました。

（図2）の状態のファイルの留め具を外すと、（図3）のように、留め具自体のサビや、資料へのサビの付着が見られます。金属製の留め具は、空気中の水や酸素と化学反応して「サビ」（酸化鉄）を生じ、資料を汚したり、傷めたりします。

目録ID	mp01060710-200010
タイトル	修学旅行の契 - 伊豆の自然と社会 明治学院中学校第二学年
受取者	本館部中
製作年	(1953年10月)
製作年コード	19530000000000
数量	1
資料状態	ホチキス除去
その他の注記	資料ID:1201811470~472はクリップ挿
言語	日本語
資料内容	旅行計画、予定コース、伊豆の名所の観光など。
所属機関	明治学院歴史資料館
原本の所在	明治学院歴史資料館
資料番号	1201811471
カテゴリ区分	文書・記録
資料種別	文書・記録
権利関係・利用条件	特目規定あり
権利関係	二次利用自由（条件付き）【Free license with Conditions】詳細は利用規定をご参照ください。
原資料の利用条件	未定
複製	オリジナル

（図1）



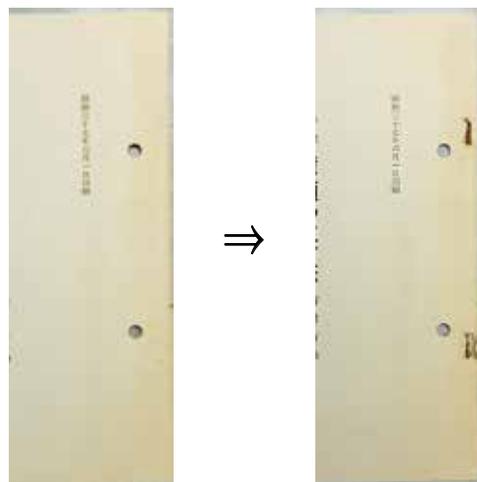
（図2）



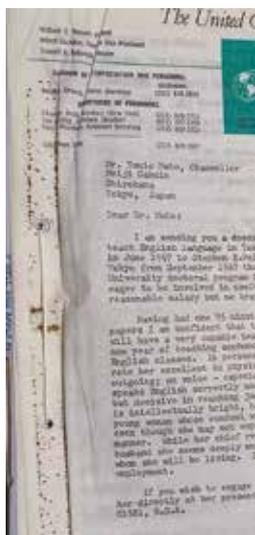
（図3）

【バラしたファイルは紙縫りで仮綴じ】

この紙ファイルは留具ごとと破棄しますが、ファイルに綴じられた資料はバラバラにしてしまうと、そこに存在していた秩序（順番）が乱されることになり、ファイルに綴じた意味（収納の時系列等の秩序）が失われてしまいます。そのため、はずした資料は順番を崩さずに和紙を用いた紙縫りで仮綴じして（図4）、保存用の（中性紙の）袋に入れて配架しました。なお、ファイル自体に書き留められていたメモ等は余さず転記しました。



（図5）



（図4）オモテ（部分）



ウラ（部分）

また、ファイルに綴じられた資料の個々に用いられていた金属の留め具や針（ホチキスやクリップなど）にはサビが見られましたので、全て除去し、必要に応じ、資料の寸法に合わせたアーカイバル用紙の二つ折りフォルダーに挟んで収納しました。

さらに、紙ファイルに含まれていた簡易製本（ホチキスによる平綴じ製本）の小冊子について見ると（図5。いずれも部分）、表紙を貼ってホチキスが隠れているもの（図5左）でも、若干変色した部分をつつくと中の金具のサビが現れました（図5右）。これを放置するとサビが広がって資料の毀損につながりますので、サビの部分はこそげ落とします。こうした簡易製本の資料は書庫のみならず事務スペース内にも多く見られるものですが、個々の資料について丁寧なチェックと処置が必要なことを痛感しました。

【博物館実習で保存対策実習を実施】

今年度は、この保存対策を始めたこともあり、毎年行っている「博物館実習」に「紙資料（アーカイブズ資料）保存の実際」の項目を入れ、「紙資料保存の基礎」についてのレクチャーと初心者向けの保存対策実習として、3名の実習生にホチキス、クリップ等はず作業を実習してもらいました。書類を綴じたホチキスはリムーバーで外すと紙を破損させることが多いので、ニッパ（工具）で細断して除去します。

簡単そうに見える作業ですが、丁寧さが求められる作業で、手を動かすと資料に延命策を講じている実感が湧いて理解が深まり、除去した留め具が山になっていくのも結構楽しいものです。（図6）は、約1時間の作業（各人、約2冊ずつの紙ファイルを担当）で除去された金属留め具をまとめたものです。

この作業は今後も折を見て継続し、必要に応じて補修等も施し、所蔵資料のデジタルアーカイブズ化に加え、未来の利用者の原物資料へのアクセスを保証すべく、資料保存対策を行っていきたいと考えています。



（図6）ミニチュア輪車にまとめた金属留め具

港区ミュージアムネットワーク、 「2022 ミナコレ (MINATO COLLECTION)」への参加 亀元 円 (学芸員)

明治学院歴史資料館は2022年1月に港区ミュージアムネットワークに加盟しました。

港区内の博物館施設が連携・協力し、区内の文化財・文化資産の有効な活用を図りながら、各館独自の事業を展開するとともに、広く情報発信し、区民と区への来訪者の豊かで充実した暮らしを実現することを目的として設立されたのが港区ミュージアムネットワークです。年に2回発行される広報誌掲載にあたっては、開催中の展示案内やスケジュールなど一般の来館者にも当館を知っていただけるよう取り組んでいます。

また、2022年12月5日(月)から12月23日(金)に港区内の美術館や博物館などの文化施設と区が連携し開催されるアートイベント、「2022 ミナコレ (MINATO COLLECTION)」に初めて参加しました。ミナコレ期間中は、参加館に設置されている NFC タグ (非接触 IC チップ) を読み取り、デジタルスタンプを集めるスタンプラリーがおこなわれました。

当館では、展示室への導線をわかりやすくするため、ポスターの設置などを工夫し、参加された皆様をお迎えしました。期間中の来館者数は、新型コロナウイルス感染症が流行する以前の2019年12月に相当するものでした。

港区ミュージアムネットワークの活動を通し、区民の皆様や区を訪れる多くの方に明治学院歴史資料館を知っていただき、明治学院の歴史に興味をもっていただけましたら幸いです。また、学院の学生・生徒も、多くの文化施設を訪れて、ぜひ豊かな文化に触れてほしいと思います。



ミナコレ ポスター設置風景



のぼり旗と NFC タグ設置風景

2022 年度博物館実習

亀元 円（学芸員）

明治学院歴史資料館では、9月12日（月）から9月16日（金）まで博物館実習を行いました。5日間の実習では、明治学院校歌と島崎藤村について、くずし字の読み方、実際に資料からホチキス針やクリップを除去する作業など、当館が所蔵する資料の特徴を踏まえたカリキュラムを組みました。実習の成果として、生誕150年を迎えた島崎藤村と明治学院についてまとめ、展示をおこないました。実習中の写真と共に、カリキュラムを抜粋してご紹介いたします。

9月12日（月）

「明治学院校歌を読む：藤村詩としての味わい」「明治学院の歴史：明治学院は時代とどう向きあってきたか」「歴史的建造物の声を聴く」と題し、主に明治学院の歴史について学びました。午後は、倉庫から資料をピックアップし、アーカイブズ資料保存（活用）の原則についてレクチャーを受けた後、資料の劣化要因となるホチキス針やクリップ等の金属製品の除去作業をおこないました。



9月13日（火）



学内の和室にて、和本・卷子本・掛軸などの形態とその取り扱い方を、実際に資料に触れて学びました。その後、展示室を見学し、展示環境などを含めた現状の課題を知り、学びを深めました。

パネルの制作レクチャーでは、実際の展示で使用するキャプションの作り方を学びました。

9月14日（水）

調査とまとめをおこないました。展示にむけて、各自の意見を出し、展示タイトルなどをまとめました。



9月15日（木）

前日に引き続き、調査とまとめをおこないました。パネルの制作をおこない、実際に展示で使用する資料を用意しました。

9月16日（金）

展示するパネルの設置、展示ケース内の最終調整をし、「明治学院校歌と島崎藤村－藤村生誕150周年記念展示－」の成果報告と振り返りをおこないました。



実習生3名は、展示についてよく話し合い、それぞれの意見を尊重しながら1つの展示をつくり上げました。5日間という限られた時間でしたが、実習を円滑に終えたことから、実習中に彼らがしっかりと学び、コミュニケーションをとって協力していたことがうかがえました。展示を企画し、つくり上げるプロセスを学び、その楽しさと難しさを経験する機会になったと思います。

◆博物館実習成果展「明治学院校歌と島崎藤村－藤村生誕150周年記念展示－」は2022年12月5日（月）より公開しています。

明治学院歴史資料館 2022年度主な活動

福田歛一先生の墨書を展示しました

大学広報誌『白金通信』（511号：2022年7月発行）の巻末「聖書のことば」に掲載された『旧約聖書』イザヤ書2章4節に関連し、故福田歛一先生（元学長・元国際学部長）による同聖句の墨書（当館所蔵）を2022年7月1日から2023年1月10日まで横浜校舎図書館で展示しました（学内者限定公開）。



展示風景

資料の受贈

頼住憲一氏 島崎藤村筆明治学院校歌詞（複製）
宮部明彦氏 学友会パンフレット-その1- 他10点
都留和夫氏 都留仙次先生葬儀音声テープCD2点

大塩武名誉教授 『真理を求めて』第1号 他19点
酒井修二氏 1970年度大学要覧 他11点
辻丸篤氏 明治学院大学バドミントン部
集合写真 他51点

講演会・教育支援等

6月28日（火）三河内彰子先生「視聴覚教育メディア論A」歴史的建造物3棟・展示室の見学 19名
9月12日（月）～16日（金）2022年度博物館実習 実習生3名
12月8日（木）辻直人先生「明治学院研究2」歴史的建造物3棟・展示室の見学 18名

購入資料 合計3点

- ・『Japanese-English and English-Japanese Dictionary.』2nd edition, revised and enlarged. (J. C. Hepburn 著 丸善商社書店 1887年出版)
- ・『Handbook of English-Japanese etymology.』(William Imbrie 著 辻元尚書堂 1887年出版)
- ・島崎藤村書簡三宅克己宛（1901（明治34）年1月22日消印）

明治学院歴史資料館刊行物のお知らせ

『明治学院歴史資料館資料集』第19集

2023年3月刊行

「船はいつこにまよふとも一井深梶之助の和歌とその周辺」

本書は、明治学院の第二代総理・井深梶之助（1854 - 1940）が詠んだ韻文（和歌、俳句、漢詩等）を当館所蔵の井深梶之助日記や説教講話集等から抽出し集成したものです。井深が引用した古歌や周辺の人々の詠草も含まれています。井深の詠んだ和歌や俳句は、伝統的な表現や技法を踏まえるほか、聖書のことばを用いたものもあり、井深梶之助の私人としての新たな一面を発見していただける内容となっています。ぜひご一読ください。

2022年度 明治学院歴史資料館委員

委員長 長谷川一 歴史資料館長（文学部教授）
委員 助川哲也 図書館長（国際学部教授）
笹田直人 大学教員（文学部教授）
西原博之 大学教員（経済学部教授）
植木献 大学教員（教養教育センター准教授）
櫛田健一 法人職員（法人事務局長）
鈴木直子 大学職員（図書館次長）
岡村淑美 高等学校教職員（高等学校教諭）
青野由美 中学校・東村山高等学校教職員
（東村山高等学校教諭）

歴史資料館

協力研究員 木村一 小暮修也 辻直人
特任研究員 細井守 松本智子
学芸員 亀元円
事務局 圓道弘子 小杉義信 三上耕一

明治学院歴史資料館 News Letter No.14
発行者 明治学院歴史資料館
発行日 2023年3月31日
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
電話：03-5421-5170
E-mail : shiryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp
WEB : https://shiryokan.meijigakuin.jp/